

# 森とともに生きて



## 森の達人、辻谷達雄さんに聞く

（その2 森の施業）

### 出材の移り変わり

急峻な山での密植・多間伐・長伐期施業を特徴とし、それゆえの密な年輪を生かして樽丸（仕込みに使う酒樽）などを生産してきた吉野林業だが、急峻であるが故に伐採や出材には厳しく難しい作業が求められる。そうした厳しい条件下での出材も、時代と共にその方法が移り変わってきた。

春から夏にかけて伐採した木を枝払いして半年間山に置き、秋の終わり頃に土場（川辺の筏編み場・現在は車積みの場所）までおろし、冬に筏を組んで下流まで運んだ。伐木を山で乾燥させることで運びやすくなるとともに、夏は増水により川の水量が安定しないため、安定する冬に筏を流すという先人の知恵をうかがい知ることができる。

### 辻谷さんの経験談

辻谷さんは今では数少ない修羅や木馬、トロッコなどによる出材の経験者である。当時の様子を次のように振り返る。

「修羅を組み立てるには、間伐材と藤や葛などのツルが必要となる。修羅で伐木を滑らせるときに油（菜種油）を撒き滑りやすくするのだが、終戦後は物不足で油が入らず水を撒いた。大人たちが柄杓の水を6mほどの幅に満遍なく撒くのを見て驚いた。新米の頃は藤や葛の採集、谷からの水汲みをやらされた。この水汲みが最も辛かった。組んだ修羅は最後にヨキ（斧）で蔓を切り、ばらした木材は足場や稲かけなどに利用するというエコな仕組みだった。

地車も手作りであった。大きな伐木は複数の人間で運ぶのだが、昔は運んだ木の重量により日当が決まっていたので、その関係もあり、できるだけ重い木を一人で運ぶ知恵として地車を使った。

修羅などで運ばれた木材は筏に組む。新米はまずとびを使って丸太に立って乗ることから教わるのだが、なかなか丸太に乗ることが出来ない。冬の作業なので川に落ちると

前回は林業家の辻谷達雄さん（川上村在住）に、植林から伐採まで吉野林業の特徴を中心にお話を聞いた。今回は、出材と山仕事の技術の継承について伺った。



図1. 木馬

てたすべり道のこと、その上に伐木を滑らせる。また、道幅が狭いところで大木を運ぶときには大勢で運ぶか、地車（車輪部分に松の木を使ったこと）から松車とも称された）を使った（図2）。昭和に入ると、人力で押すトロッコを使うようになった。

以上の方法による土場までの出材は1955年くらいまで行われていた。また、土場から先、和歌山（昭和のはじめからは野木場がつくられた吉野町）まで川での筏流しに



図2. 地車

採算をとることができたのだ。現在も吉野ではヘリコプターによる出材が中心となっているが、費用が高額であり採算にあう高級材しか出材できない。高級材以外は伐採のまま放置されている。

それは冷たく凍えそうになった。そのうちに筏がなくなり、とうとう乗らなれぬであった。今でもこの寒かったことは忘れられない。

架線の時代には、まるで映画の中の囚人のように30人くらいでワイヤーを担いで山にあげ、木に登っては垂れて引つかからないように上げる作業も行った。このころは作業員全員が当たり前のように木登りができた。架線も後には、山の尾根伝いに1000mから2000mの集材架線を張り、ロープウェイのように動力で運ぶようになり、この作業を行うのに林業架線主任免許がいるようになった」

川上村でヘリコプターによる出材作業を最初に行ったのも、他ならぬ辻谷さんである。

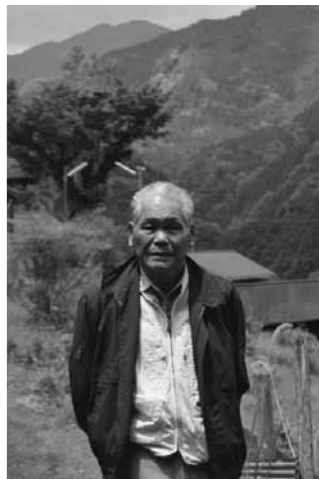
### 林業における後継者問題

林業は今も川上村の主産業だが、天候に左右される不安定な仕事でもある。健康保険は「日雇健康保険」で、年金も国民年金のみ。この状態ではこれから若者が林業に携わらなると考えた辻谷さんは、1994年に「山づくりは人づくり」をモットーに会社を起した。保険は社会保険、年金は厚生年金とし雇用保険

にも入った。会社の負担は増えるが、将来を見越して福利厚生面を整えたのだ。

若者を雇用するため、奈良テレビで辻谷さん自身が登場するCMも流した。この試みは、新たな顧客から仕事の注文がどんどん入るといって思わぬ副産物をもたらした。他に新聞広告を出したり、自衛隊の退職者にも声をかけた。しかし、山の仕事は想像以上に厳しく、10人採用しても1人残ればいい方だった。厳しい肉体力労働にもかかわらず日給制で、雨が降れば休みとなるため収入が安定しなかった。何とか月給制度に移行できないかと考えたが、そうすれば長雨が続き会社に入らなくなるとも給料は払わねばならぬ。そこで雨の日の仕事（杭を集めてマキにするなど木と関わる仕事。労賃は日給の半額）を探したりしたが、厳しい肉体力労働のため、雨の日

もあまり、月給制にはできなかった。また、ボーナスのある役場職員の内給より少なくなるため、何とかボーナスを出したいと考え、仕事をすれば1日1000円を積み立てておき、ボーナスとして支払うようにした。「これが精いっぱいであった」と辻谷さん。



辻谷達雄さん

よって運ぶ方法は、幕末のころから1951年までのおよそ200年にわたって続けられた。その後は、架線（山にワイヤーロープを張り、伐木をつるしてロープウェイのようにして運ぶ）と、山奥まで林道が整備されるに従ってトラック輸送による出材へと変わっていった。

1970年頃からはヘリコプターによる出材が中心となった。当時は2tの木材を運ぶのに1分間1万円（1時間60万円）、空で現地まで飛んでくるのに7万円かかったが、高級材が多かった吉野ではこの方法でも採算をとることができたのだ。現在も吉野ではヘリコプターによる出材が中心となっているが、費用が高額であり採算にあう高級材しか出材できない。高級材以外は伐採のまま放置されている。

### 早期に社長職を譲り社員の若返りに成功

1998年、65歳で28歳の息子さんに社長職を譲った。それは、社長が若いほうが若い社員が集まると考えたからだ。その結果、今は30代5人、40代3人、60代1人と若い社員が定着している。

これまでの会社経営を振り返って、いちばんつらかったのは木材不況が最もひどかった10年前という。その時息子さんには、歯を食いしばって若い者を育てよう、そしてこれからは「林業50パーセント他の仕事50パーセント」で会社運営するようにアドバイスした。今では、近鉄電車の線路脇の危険木撤去作業や草刈り、国有林の仕事、室生寺や春日大社の木の伐採など、仕事の幅も広がっている。

最後に辻谷さんが強調されたのは、「なんとんでも後継者が育つには、木材の需要が増えるのが一番」という点であった。

今回は、山での暮らしの工夫や知恵、自然の素晴らしさを次の世代に伝えたいとの想いで辻谷さんが主催している「達ちゃんクラブ」「源流塾」の活動を紹介する。